

博士論文の要約

論文題目 日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の記述とその歴史的変遷
—数詞および親族表現に着目して—

氏名 相良 啓子

本研究は、日本手話と、日本手話と系統的に関連のある台湾手話、韓国手話の3言語（以下、「日本手話系の言語」とする）について、数詞および親族表現を記述し、その記述に基づいて音韻、形態、そして意味の観点から語彙の変化の特徴を明らかにするものである。これらの言語は、1945年以降に日本手話から分岐したことが知られている。本研究では、数詞と親族表現に焦点を絞り、これらの語がどのように表現されるかについて、①分岐前と後の日本手話系の言語に関する文献資料、②現在の高齢話者の記憶に残る手話や各手話話者に「古い」と認識されている表現、③それぞれの言語で現在使われている表現に関するデータをまとめた。また、それに基づき日本手話系の言語における変遷の経緯を明らかにし、特徴をまとめ考察する。

より具体的には、以下の3つを研究課題とする。

- 1) 1900年代から1960年代までの日本手話と現在使われている日本手話、台湾手話、韓国手話を比較して、数詞および親族名称における形の違いをまとめる。
- 2) 分岐後、3つの手話言語がどのように変化したのかを明らかにする。また、語彙の形の変化と意味の変化の両方について記述する。
- 3) それぞれの変化について、現在の話者が使う語と地域差や年齢差との関連を調査し、変化の全体的な流れを検証する。

分析するデータは、1900年代から現在に至るまでの文献資料に記載されているデータと、筆者が2012年から2018年に渡って行ったフィールド調査で収集したデータである。収集したデータには、歴史的に関係があるとわかっている地域、すなわち、東京、大阪、台北、台南、ソウルの5地域のデータがある。また、台湾および韓国に伝わったものの中には日本で使われていた地域変種がある可能性もあるため、新潟、鹿児島、熊本、京都、群馬、北海道、山口のデータも含めて分析対象とした。データ収集は、各話者が使用する語彙を網羅し、かつ、自然な会話で使われる語彙も観察できるように、ふたつの方法で行った。ひとつは、スライドで示した語彙をひとつずつ、手話で表現してもらった方法で、これにより、各話者自身が使う、もしくは使うと思っている語彙の表現を記録した。もうひとつは、数詞や親族表現が出てくるゲームや場面を設定し、会話の中に出てくる表現を記述する方法で、知り合いの話者どうし2名ずつ組みになってもらい、数合わせゲームや値段交渉ゲ

ームをする場面、家系図を見て家族の話をする場面をビデオに収録した。これらのデータに基づき、文献資料における記載も参考にしながら、変化がみられる例を取り上げてその変遷を分析した。

先行研究の問題点には、これまでの手話言語学の歴史言語学研究が、個別に観察される程度にとどまっていること、手話比較の再建の方法や、記述法が確立されていないことが挙げられる。そのため、本研究では、言語変化をより正確にわかりやすく示す手段としての記述法を提案した。手話の記述法は、各指に番号をふり、形、動き、そして位置を合わせて音素レベルで語を記述するための方法となっている。指にふる番号は、人差し指から小指を1~4、親指を5という番号で表現する。指の形については、まっすぐ立てる形「S」(Straight)、指を曲げた形「B」(Bend)、親指とその他の指をつまむように合わせた形「P」(Pinching)の記号を使う。手のひらの向きは「P」(Palm)で表し、手のひらが相手側を向いている場合には「P+」、自分側の場合は「P-」、下向きの場合は「Pdown」、上向きの場合は「Pup」、横向きの場合は「Pside」で表す。手の向きについては、上(↑)、下(↓)、横(→)、相手側(+)、自分側(-)、斜め上(↗)の6方向とする。手の動きについては、21種類の動きを示した。例えば、人差し指を曲げたり伸ばしたりする動きを繰り返す動きをとまなう場合には「S₁^{trill}」とし、手全体を左右に小さく揺らす動きを、「S₁^{shake}」とする。手の位置については、特に親族表現においては、手の「位置」が意味にかかわる大切な音素となっているため、手の位置が縦方向、横方向および身体上で接する「位置」の記述を示した。また、「外転」「内転」「撓屈」「伸ばす」「下に折る」などの手首の動きも含めた。他に、両手で表現するもので接触があるものとないものの区別、動きに繰り返しがあがる場合の記述も加えた。この記述法を使って音素を示すことにより、音素間の比較と言語変化の記述が可能となった。

論文の構成は以下の通りである。第1章では、本研究の目的を示し、日本手話系の言語が分岐に至った歴史的背景、言語の変化に関する先行研究をまとめ、これまで明らかにされてきたこと及び問題点を整理した。日本手話系の言語が分岐に至った背景は、台湾では1895年から1945年、韓国では1910年から1945年の日本統治時代に、日本から聾啞教育関係者がそれぞれの教育機関に派遣されたことと関係が深い。台南には1915年に大阪から、台北には1917年に東京から教員が派遣され、台湾では台南と台北に地域変種があることがわかっている。一方、韓国では、1913年に東京からソウルに教員が派遣され、後に同じ地域に大阪の教員も派遣された。韓国では、ソウルを中心として各地域に手話が広がったため、日本および台湾と比較すると地域変種が少ない。

こうした歴史的背景を踏まえて、第2章では、数詞のうち「1」~「9」、「10」「100」「1000」とその倍数、二桁~四桁の組み合わせの数を取り上げ、1900年代から現在にわたってみられるさまざまな表現を記述した。分析にあたっては、わかりやすく記述するために、数をその形態と構成に分けて検討し、「一形態素からなる数」「縮約型」「加算型」「同時・乗算型」「継時・乗算型」「デジタル型」の6つに分類した。形の変化と意味の変化の両方につ

いて記述し、主に数詞の形にみられる変化の特徴をまとめた。意味の変化については、現台湾手話の「10」「100」「1000」においては意味の縮小がみられること、また、現日本手話の「100」とその倍数においては、意味の拡大がみられることを示した。

第3章では、親族表現に焦点を当て、第2章と同様に1900年代から現在使われている表現を記述し、変化がみられる例を取り上げて、記述法を用いて語彙の変遷を示し、分析した。対象とした語は、日本手話系の言語の親族表現を表す基本形となる「男」「女」を含めた、「父」「母」「祖父」「祖母」「息子」「娘」「夫」「妻」「兄」「弟」「姉」「妹」「兄弟」「姉妹」「伯父」「叔父」「伯母」「叔母」の20語である。これらの語彙の分析の結果、韓国手話の「男」「女」の表現では、日本手話の複数形の意味で使われていた「男たち」「女たち」の語が、韓国で使われていくなかで「男・男たち」「女・女たち」の一般形で使われるようになり、そこに意味の変化がおこったことを示した。また、形の変化には、親等による違いがあることがわかった。すなわち、一親等の親族表現では、日本手話系の言語は同じか音韻が少しだけ違う表現が使用され、二親等では、歴史的な関連性が表れるような形態の違いもみられ、三親等の表現になると、語の構成が全くことになっている表現がみられるなど、親等によって語の変化の度合いが異なることが明らかになった。

第4章では、本研究で対象とした数詞および親族表現の変化の中で共通してみられた6種類の音変化についてまとめた。具体的には、「中和」「簡略化」「消失」「融合」「同化」「両手化・対称化」である。まず、「中和」とは、ふたつ以上の対立項が一定の環境で対立をなさなくなるという現象であり、特定の語にのみ起こる。「中和」の例には、鹿児島県の「9」「90」の例があり、いずれも親指が立っていても立ってなくても意味には関係しない。「簡略化」とは「ももとの動きが省略されて簡単に表すこと」を指すが、日本手話の「10」の倍数で、指の曲げ伸ばしを繰り返す動きが省略され、曲げる動きは1回だけの動きとなった例、親族表現では、頬をつまんで肉親を表す表現が、触れるだけとなった例が挙げられる。「消失」とは、「語の一部の要素が消失すること」を指す。両手の表現から片手の表現へと変化し片手が消失した例があり、日本手話系の言語の「100」および「1000」とその倍数がこれに該当する。また、日本手話の親族表現「兄」「弟」「姉」「妹」「祖父」「祖母」および「伯父」「叔父」「伯母」「叔母」では、「血縁」を示す人差し指で頬に触れる形態素が消失したことがわかった。「融合」とは、「もともと複数の語からなっていた語（複合語）が、音変化を経て、当初構成していた語には切り分けられない形になって現れること」をいう。これには、数詞表現では、現北海道手話では「12」～「15」、現群馬手話では「12」～「19」で、継時的複合の加算型から縮約形に融合した例が挙げられる。いずれの言語も「11」では融合がおこらないことがわかり、「11」～「19」では、パラダイムの中で部分的に変化が起こる「水平化」がみられる。最後に、「同化」とは、「他の音に影響されてそれと共通の特徴を有するようになること」である。同化には二種類あり、ひとつは、先行する音の影響で後続する音に前の音の特徴の一部または全部の特徴を有する「順行同化」で、もうひとつは後続する音の影響で先行する音に後続する音の特徴の一部または全部の特徴

を有するようになる「逆行同化」である。いずれも、数詞および親族表現でみられた変化である。また、上述した6種類の音変化の他に、語の「入れ替え」がある。「入れ替え」とは、それまで使われていた「語」が使われなくなり新しい「語」が使われるようになった現象を指す。例えば、東京および奈良の「5」は、全ての指を選択指として立てて表していたが、現標準日本手話の影響を受けて、親指だけを立てて表す「5」へと入れ替わった例が挙げられる。現標準日本手話の影響を受けて「入れ替え」が起こった例は、数詞および親族表現では多くみられ、そこには、以前は各地域で異なる表現が使われていたが、次第に標準化され地域変種が減っていく様子が窺える。第4章では、本研究でみられた変化のうち、中和、簡略化、消失、喪失、融合、同化、水平化、語の入れ替えは、音声言語にも手話言語にもみられる変化である一方、中心化、両手化・対称化など、手話言語独自にみられる変化があることを示した。

第5章では、現在の日本および台湾における話者層による使用表現の違いに、統計的な有意差があるかどうかについて調査した。地域および年齢と実際の使用語彙との相関について明らかにし、語彙使用の変化のあり方について考察した。数量的分析を可能にするため、現標準日本手話の二種類の表現に対象語彙を絞った。それらは、親指とその他の指の先を接触させて「ゼロ」に見立てて桁の違いを表現する数および継時・乗算型で表す数とその倍数（ここでは「Z系」の表現とする）と、同時・乗算型の数とその倍数である。その結果、現在使われる日本手話と台湾手話には共通する分布状況があることがわかった。すなわち、歴史的に関係が深い大阪を中心とした近畿と台南では、同時・乗算型の表現よりもZ系の表現を使う頻度が高く、いずれも高齢の話者に、より多くみられる傾向があることを統計的に示した。一方、東京を中心とした関東と台北では、いずれも同時・乗算型の頻度が高く、「10」についてはどちらの地域でもZ系の表現はみられなかった。その一方で、関東では「1000」で、台北では「100」でZ系が使われる頻度が高く、それぞれ語は異なるものの、一部でZ系を好んで使う傾向があるという共通点がみられた。このように、第5章では、数量的なアプローチにより、変化の実態を現状に基づいて把握できることを示した。

第6章では、本研究の結果および明らかになった変化についてまとめた。また、本研究における学術的な貢献および今後の課題について述べた。

本研究では、分岐後に、それぞれ言語および文化が異なる社会背景の中で発達してきた言語の比較を行い、その中で、共通する変化や異なる語彙の発達過程を示すことができた。数詞および親族表現の言語変化に関する比較再建を行うことにより、手型、動き、および位置に属する音素が主な構成素となっている語彙体系の歴史変化についても明らかにした。また、手話言語においては、写像的な表現が音声言語より多い印象を持たれているが、写像的な表現からできた語であっても、使われていくうちに抽象化が進み、言語の仕組みの一部として機能する方向に変化する。これまでの歴史言語研究においては、恣意性が比較のための重要な要素であると考えられてきたが、本研究により、恣意性の高低により、比

較の対象となる語彙を区別せず、その発達経緯を検証する必要があることを示すことができたと考えている。

本研究は、これまで、地域によりさまざまな表現があることが知られていたが、その実態が知られていなかった日本手話系の言語の文献資料における記述から現在にわたるデータをまとめた初めての資料となる。また、これまで主にアメリカ手話に限られていた言語変化の様相の詳細を、日本手話系の言語について明らかにした初めての研究でもある。加えて、手話言語の変化を記述するためには、音素という概念が重要であることを示したという点で、初の試みでもある。今後は、数詞および親族表現以外の領域に対象を広げ、さらに意味の変化について追究するために、語彙だけでなく、文レベルでの例を収集し分析を深めていきたい。

本研究で分析対象とした語彙は限られてはいるが、今後、手話言語学において広く、歴史言語学的研のための土台を提供できたと考えている。